Management Club Report

Oct.2016/Vol.166

Monthly Opinion ≪超高齢社会に適応する組織作り≫

WHO（世界保健機構）や国連が定めた社会の高齢化の定義は３段階に分かれているそうです。65歳以上の高齢者が全体の人口の中で占める割合である高齢化率が7%を超えた社会を『高齢化社会』、14%を超えた社会を『高齢社会』、21%を超えた社会を『超高齢社会』と称しています。

この基準に従って日本の社会を見てみますと、初めて『高齢化社会』となったのは1970年（昭和45年）、そして1994年（平成6年）に『高齢社会』、2007年（平成19年）には『超高齢社会』と進んで参りました。

言葉として使うときに最近まで『少子高齢化社会』などと勝手に言っておりましたが、高齢化ではなく高齢社会、それも超が付くウルトラ高齢社会にもう既に９年も前からなっていたのです。

何と今年１０回目を迎えるスタッフリーダー・ミーティングの第１回開催年と同じでした。

歯科医院が超高齢社会の中でどのような役割を果たすべきなのか、またそういう社会の中で組織はいかにあるべきなのか、若年層の労働人口減少が現実の問題として歯科医院経営を揺るがす事態が起きているなかで、これからの採用はいかにあるべきなのか、大変大きくて重い問題です。

今月は私の極めて個人色の強い考え方ではありますが、問題提起として上記３点について述べてみたいと思います。

1 デジタル社会が生み出す光と陰

頻発する陰惨な事件

最近のニュースを観ていて感じることは、昔は無かったような残忍な事件が多いことです。一つは『親殺し・子殺し』、一つは『誰でもよかった無差別殺人』、そしてもう一つは『バラバラ遺体殺人』です。

昔もこのような事件は皆無ではありませんでしたが、現代のようにニュースショーの話題に事欠かないほど次々と新事件がおきるようなことは無かったと思います。

これらの信じ難い事件が頻発するのは、現代社会に一種の病巣がはびこっているからだとするならば、その病根はどこにあるのでしょうか。